



檜原小だより

〔学校HP〕 <http://www.edu.city.hachioji.tokyo.jp/school/nrhre/>

令和2年2月1日
八王子市立檜原小学校
校長 原市裕
学校だより No.12

「次世代を豊かに生き抜くプログラミング教育」

副校長 中村 理明

令和2年度からの「小学校プログラミング教育の必修化」が注目されています。全国の公立小学校保護者を対象にした、朝日・ベネッセ共同調査結果を見ても、「プログラミング教育の導入」についての保護者の高い支持率（肯定的意見が82.6%）がわかります。

今の子供たちが社会で活躍する時代は、科学技術の進展に伴い、今以上にAI（人工知能）技術やロボット工学、インターネット活用が進行することは容易に推察されます。AIやロボットに代替可能な仕事は、全体の49%にもものぼるといわれています。一方で、新たに創出されるといわれる仕事のその殆どは、コンピュータを使うことによって、より安心して安全で豊かな生活を目指し、コンピュータの機能を最大限に発揮できるように、必要な手順やその組み合わせ方を考える思考力（プログラミング的思考）の素養が不可欠の職業ばかりだと予想されています。昨年度行われた政府の「未来投資会議」においても、プログラミングは、これからの時代の「読み、書き、計算」であることが、議長を務める内閣総理大臣からも述べられました。

しかし、必修化といっても、次年度から「プログラミング教育」という新しい教科が作られるわけでもなく、小学校の段階で特定のプログラミング言語でのコーディング（コンピュータへの命令）を覚えさせ、将来のプログラマー育成を目指すものでもありません。小学校のうちから、体験を通して、自らの問題解決にどのようにコンピュータが活用されていくのかイメージできること、つまり、コンピュータを利用しながら、その考え方や機能が社会にどう役立つかを紐づけて考えられるようになる力の育成が目的です。

逆に言えば、ただコンピュータを操作したり、体験することだけを目的としたプログラミング活動を経験したりするだけでは、肝心のプログラミング的思考は育ちません。そこに、自らの課題解決に向けた目的意識や論理的な思考力や表現力を伴った学習体験が必要です。全国的な学力調査の結果を受け、多くの専門家が、小中高生や大学生の読解力の低下と論理的思考力の欠如に警笛をならしながら、それらを伴わないプログラミング教育では、社会的な課題を解決する「生きる力」にはつながらないということを指摘しています。

本校でも、今回の学習指導要領の改訂の背景とプログラミング教育導入の趣旨を十分に踏まえるとともに、各教科の内容を指導する中で、プログラミング的思考を育む活動を積極的に取り入れていきます。コンピュータを活用する活動以外にも、児童の発達段階に合わせて、児童が自らの課題を解決する過程で、言語や図や表、具体物を使用しながら「必要な手順やその組み合わせ方」を思考する探究的な学習を進めていきます。また、コンピュータの、その試行錯誤のし易さを生かした授業を展開させたり、その表現の広がりを生かした対話的な学習を充実させたりすることで、論理的な思考力や豊かな表現力の育成を図り、児童の確かな学力へとつなげて参ります。

